

チェルノブイリ原発事故の伝承方法に関する調査

総合人間学部 4年

中丸 和

ウクライナ

2020年2月27日～2020年3月7日

計画の概要

1. 本調査の目的

本調査の目的は、チェルノブイリ原子力発電所が立地するウクライナにおいて、チェルノブイリ原発事故がどのように伝承されているのかについての基本的資料の収集を行うことである。福島第一原発事故から10年近い歳月が経過したが、その経験を後世にどのように伝承していくかということが今後も大きな課題であり続けることは間違いない。本調査では、特にウクライナの教育現場におけるチェルノブイリ原発事故の伝承を先行事例として捉え、そこから日本の教育における原発事故に関する伝承に対する示唆を得ようと試みた。

2. 計画の概要

2020/2/27	移動（出国・機内泊）
2020/2/28	ウクライナ現地コーディネーターの方と打ち合わせ
2020/2/29	アートスクール見学、宇宙博物館、公園見学
2020/3/1	図書館、博物館見学
2020/3/2	日本とウクライナで原発事故の伝承に関する活動などを行っている方へインタビュー
	チェルノブイリ原発事故の際消火活動にあたった消防士の方へインタビュー①
	チェルノブイリ原発事故の際消火活動にあたった消防士の方へインタビュー②
2020/3/3	オブルチにある学校見学・先生や生徒にインタビュー
2020/3/4	ジトーミルの学校の先生へインタビュー
	ジトーミルの幼稚園の先生へインタビュー
	ジトーミルの職業学校の見学・先生へのインタビュー
	キエフへ移動
2020/3/5	子どもなどに向けて伝承活動を行っている団体の方へのインタビュー・チェルノブイリツアー参加
2020/3/6	移動（機内泊）
2020/3/7	移動（帰国）

成果

成果1. チェルノブイリ原子力発電所ツアーに参加し、チェルノブイリ原子力発電所の今について知ることができた。

チェルノブイリ原子力発電所の見学ツアーでは、原子力発電所以外にも、事故後人々が避難して以降そのまま残された幼稚園や住宅街、学校などを見た。人が全く手入れをしていない街であるため、建物が崩れている部分があるなどチェルノブイリの現状に関して知ることができた。また、本ツアーがウクライナ外の人々にとってチェルノブイリ原発事故について知ることのできる貴重な機会の一つであることがわかった。

成果2. チェルノブイリ原発事故によって避難区域となった地域に存在する学校やチェルノブイリ近隣地域にある学校などを見学し、先生方にインタビューを実施。

ジトームルにあるアートセンターを見学、ジトームルにある中学校、職業学校や幼稚園、オブルチにある学校の先生方へインタビューを行った。アートセンターでは絵を描くことを通して、チェルノブイリ原発事故について学んでいたり、日本の学校との国際交流活動の一環として原発事故について学んでいたりしていることがわかった。また、オブルチにある学校では、原発事故が起こった日である4月26日には、消火活動にあたった消防士の方の講話を行うほか、チェルノブイリ原発事故について特に扱う教科書や指導書に基づいて伝承活動を行っていることがわかった。

成果3. チェルノブイリ原発事故において消火活動にあたった消防士たちにインタビューを実施。現在どのような伝承活動を行っているかについて伺うことができた。

消火活動に従事した消防士さんが働いている消防署では、チェルノブイリ原発事故に関する資料が展示されており、そこには特に4月26日には多くの子どもたちがやってきて学ぶということがわかった。また、消火活動に従事した人々を称える像を建てており、その像を通してチェルノブイリ原発事故があったということに触れることができるようになっていた。

成果4. キエフなどの地域の学校に対してチェルノブイリ原発事故の伝承活動を行っている団体へのインタビューの実施。

チェルノブイリ原発事故について子どもや先生方に伝える活動を行っている公立の団体が存在していた。伝承の授業では、動画を使ったり、専門の大学教授のお話を伺ったりするという。活動を通して、子どもたちはチェルノブイリ原発事故に対して何かしなければならぬと考えるようになるという。

成果5. 学校においてチェルノブイリ原発事故について伝えるときの教科書や指導書とい

った資料など、原発事故に関して書かれている基本的な資料の入手。

コロナウイルスの影響がウクライナにおいても出始めた時期であったため、本来伺うはずであった学校に行けないといったこともあったが、十分にインタビューを行うことができ、資料も入手することができたと考えている。また、チェルノブイリ原発事故について積極的な活動を行っている方々や、現地の学校の先生とのつながりを得ることができ、これからの調査活動へと発展していける渡航であった。

以上のような有意義な活動を実施できたのは、現地でコーディネートをしてくださったドンチェバさんのおかげであり、また助成金という形で渡航の後押しをしてくださった本制度のおかげです。厚く御礼申し上げます、感謝する次第です。ありがとうございました。

